

農村における女性起業の意義と可能性ー農村の女性起業実態調査を通じて

(社)地域社会計画センター 岩崎由美子

農山漁村においては、女性が主体となった朝市や農産加工・販売、産直等が行われ、地域社会さらには地域経済の活性化に貢献しているケースが数多く見られる。これら活動は、生活改善グループや農協婦人部など地域の小さなグループ活動から生まれており、農家生活の中で蓄積されてきた生活技術に対し経済的価値を付加させていく行為である。かかる女性たちの活動を「女性起業」という視点からとらえなおしてみると、新しい芽として評価されるべき点が多い。また、農林水産資源の豊富さ、空間の豊かさ、共同の資源管理や労働経験の蓄積、生活技術の継承等、これら農村ならではの有利性を活かした女性起業は、生産と消費を直結させる場として非常に有効かつ貴重な存在であり、今後の農村において多様な展開の可能性をもち、またその役割と波及効果にも大きな期待がよせられているともいえよう。

農村女性の側から見れば、女性起業は、農山漁村の女性の主体性を発揮する場の1つとして非常に有効なものである。伝統的な性別役割分担意識の根強い地域社会において、また「イエ」意識に基づく世帯単位主義のなかにあつて、女性自身の自発性は抑えられ、女性の担う役割を目に見えるものとして位置づけることは、かなりの困難をともなう。しかし、女性起業において経済的自立の1歩をふみだし、主体性と能力を発揮しつつ周囲の人々の共感と理解を得、さらに、より多くの女性たちに刺激を与えながら、地域におけるネットワークを広げていく女性たちの活動は、農村における女性の地位向上に大きな貢献を果たしている。

一方、都市においては、市民運動やボランティア活動あるいは生協活動の中から、多くの女性起業が生まれている。「ニューワーク」、「新自営業」、「市民事業」、あるいは「ワーカーズコレクティブ」といった言葉で表現されるこの動きは、従来の男性主導型社会が築き上げてきた働き方に対しもう一つの働き方（オルタナティブワーク）を提示する。即ち、雇われる働き方から、地域に密着した主体的・創造的な働き方を模索し、また、社会的に有用な働きであるにもかかわらずシャドーワークとされてきた家事、育児、高齢者介護等の分野に、経済的な評価を与えようとするものである。

都市と農村の女性起業の特性を比較すると、都市の女性起業においては、「雇用関係の見直し」「専業主婦の仕事づくり」「企業論理からの離脱」「コミュニティの創出」が目指されているとすれば、それに対応するものとして農村の女性起業では、「家族従業の見直し」「家の仕事以外の選択肢の創出」「イエにおける個の確立」「地域おこし」が目指されているとも整理できよう。一方、「シャドーワークの経済的評価」「ソーシャルバリューワークの重視」「ネットワークの形成」といった特性は、都市・農村共通のものとして挙げられる。

本報告では、平成4～5年に農林水産省の委託により実施した農村女性起業実態調査結果から、農村女性の起業の全国的な動向を紹介する。次に、女性起業代表者の意識調査結果から、女性起業に取り組む女性の主体的条件を明らかにし、農村と都市における相違点と共通点を分析する。以上の作業を通して農村の女性起業の特徴を描き出し、農村女性起業の意義と今後の可能性について検討したい。